

水稻新奨励品種「にじのきらめき」の特性

～多収で玄米外観品質が優れる品種～

1. はじめに

近年、出穂期以降の高温条件により米の品質低下が大きな問題となっている。これまで高温下において白未熟粒（乳白粒、基部未熟粒、腹白粒等の総称）の発生が少ない品種として「つや姫」、「きぬむすめ」、「にこまる」を県主要農作物奨励品種に採用してきた。令和4年2月に新たに農研機構中日本農業研究センター北陸研究拠点で育成された「にじのきらめき」が同奨励品種に採用されたので本品種の特性について紹介する。

2. 「にじのきらめき」の特性

「にじのきらめき」は次のような特徴を持つ（表1、2）。

(1) 早晚性

「キヌヒカリ」と比べて出穂期は2日程度遅く、成熟期は5日程度遅い。

(2) 草姿、草型

「キヌヒカリ」と比べて稈長は約11cm短く、穂長は約2cm長い。草型は穂数と穂長のバランスがとれた中間型だが、穂数は多い。

(3) 収量性

「キヌヒカリ」と比べて千粒重は重く、着粒密度が同程度なことから多収である。

(4) 玄米特性、食味

「キヌヒカリ」と比べて大粒で整粒率が

高く、白未熟粒の発生が少なく、玄米品質は優れる。しかし、他未熟粒の発生が多い傾向がある。タンパク質含有率やアミロース含有率が低く、食味値は高い。炊飯米の食味も優れる。

(5) 病害、障害抵抗性（育成地のデータより）

- ・いもち病真性抵抗性遺伝子型は“Pia,Pii”と推定され、葉いもち圃場抵抗性は同等の“中”。穂いもち圃場抵抗性は“やや強”。
- ・白葉枯病抵抗性は“やや弱”。
- ・縞葉枯病抵抗性は“抵抗性”（キヌヒカリは“罹病性”）を有する。
- ・倒伏はほとんど発生せず、耐倒伏性は“強”。
- ・高温登熟性は“やや強”。
- ・穂発芽性は“難”で優れる。

3. 栽培上の留意点

「にじのきらめき」の適地は県下全域の平坦地～中山間地と考えられ、特に「キヌヒカリ」の外観品質低下が問題となっている紀中～紀北地域の平坦地での普及が望まれる。

いもち病に対する抵抗性は中程度のため、一般的な防除が必要となる。縞葉枯病に対して抵抗性を有するので、その障害が懸念される地域でも栽培適性があると考えられる。

（栽培部 川村和史）

表1 「にじのきらめき」の生育、収量と収量構成要素

品種	移植期	出穂期	成熟期	稈長	穂長	穂数	精玄米重	同 対	玄 米
	(月・日)	(月・日)	(月・日)	(cm)	(cm)	(本/a)	(kg/a)	標準比 (%)	千粒重 (g)
にじのきらめき	6. 4	8. 12	9. 19	70.1	19.8	324	56.0	111	23.5
キヌヒカリ	6. 4	8. 10	9. 14	81.4	18.1	296	50.4	100	22.1

注) 数値は試験場内における2016年～2021年の平均値

表2 「にじのきらめき」の品質およびタンパク質含有量

品種	整粒 (%)	未熟粒 (%)					被害粒 (%)	死米 (%)	玄米品質	タンパク質含有率 (%)	食味値 (S-HON)
		乳白粒	基部	腹白	青未熟	他未熟					
にじのきらめき	67.8	0.8	0.5	0.5	2.9	22.4	4.5	0.4	5.2	6.15*	76.9*
キヌヒカリ	63.2	5.8	1.1	1.4	1.6	20.9	5.4	0.4	7.9	6.56*	74.5*

注) 数値は試験場内における2017年～2021年の平均値。穀粒判定機（静岡製機ES-1000）で測定。

*印は2016年～2021年の平均値。近赤外分析計（サタケRLTA10B）で測定。

玄米品質は玄米の外観品質について1(上・上)～9(下・下)の9段階評価